

平松京一先生を偲んで

日本鋼管病院 放射線科
成松芳明



去る2020年9月27日、日本IVR学会名誉会長、平松京一先生が、享年85歳でご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。コロナ禍の中で、会員の皆様には訃報をお伝えするのが遅くなりましたことをこの場をお借りして、お詫び申し上げます。お見舞いやご葬儀への参列も制限されるなかでしたが、ご葬儀はご家族に見守られて、しめやかに執り行われたことを謹んでご報告させていただきます。

平松先生は1934年東京都にお生まれになり、1959年に金沢大学医学部を卒業されています。1年間のインターンの後、金沢大学大学院研究科を経て、1964年金沢大学医学部放射線医学教室へ入局されました。その後、東京大学医学部放射線医学教室助手となり、1967年米国ハーバード大学放射線科へ留学され、Abrams教授のもと Cardiovascular Radiology を研鑽されました。

東京大学への復帰後、1971年に慶應義塾大学放射線診断部専任講師として就任され、その後の活動をスタートされています。1976年には助教授となられ、1991年に慶應義塾大学医学部放射線科学の教授に就任され、2000年に定年退職されていますが、この間、本邦の放射線診断学、特に血管造影と治療応用；IVRの領域で、手技や器具の開発、

普及また後進の指導に多大な功績を残されたことは、皆様よくご存じのことと思います。この業績に対して、1995年「血管カテーテル法の治療応用」にて慶應義塾賞を受賞されています。

教授在任中には日本医学放射線学会総務理事、日本血管造影・IVR学会総務理事、日本血管内治療学会理事、日本脈管学会理事などを歴任され、本学会では定年退任後より名誉会長の職を務めてこられました。

平松先生の大きな足跡は、我が国におけるIVRの普及と、放射線科の国際化といえるのではないのでしょうか。私が入局したのは、まだ血管造影が診断に使われていた時代ですが、入局した際のレジデントにも、分け隔てなく手技を教えていただきました。読影後の翌日の準備では、使用するカテーテルを1本のチューブから作製するのを手取り足取り教えて頂いたのを記憶しています。この中庸の精神の下、学内では血管造影を志す医師は後輩に知識のすべてを伝え継いで、現在までに多くの仲間を生んでいます。また、平松先生を慕って国内外から診療科を超えて、多くの留学生を迎えましたが、この先生方との交流も、その後の私達の教室の活動の大きな糧となっており、国内での血管造影手技の普及という点からも貢献できたと確信しています。

学会の懇親の場では、平松先生の周りには、いつも多くの人が集まり、笑顔での交流がありました。この流れが、1982年に日本IVR学会の前身である、日本血管造影・Interventional Radiology 研究会の設立に向かったのは当然のことであり、その後、「血管造影」の削除や「IVR」への名称変更などを経て、正会員数2,700名余りの現在の日本IVR学会に至っています。私事にはなりますが、研究会の立ち上げから、学会への移行や社団法人化、専門医制度の創設など、この間事務局の業務を平松先生の下でサポートさせて頂き、貴重な経験を得たことを感謝申し上げます。

先生は常に世界の中での放射線科医を意識され、医局員には学会活動においても、国際学会の英語での発表、そして海外への留学を勧められました。今では、国際学会での発表は当たり前

のこととなりましたが、当時のご自身の経験から、外国での放射線科の教育、診療体制を知ることは非常に大切だと、背中を押されて留学を決意した医局員もたくさんおりました。特に、教授に就任されてからは、IVRのみならず、MRI、CTなど他の領域でも、ハーバード大学、オレゴン大学、テキサス大学MD Anderson Cancer Centerなどと活発な交流を推進され、留学先での多くの同窓生の繋がりが形成されていきました。

また、これら海外の多くの著名な指導者を日本に招待して、国際シンポジウムを企画し、国内でのIVRの啓蒙、普及に力を入れてこられたのはご存じのことと思います。実際に海外のリーダーたちに、腫瘍に対する手技を中心に発達した日本のIVRの特徴とその実力を目の当たりにしてもらうことが、その後の国際交流の発展に大きな力となりました。1988年箱根での第2回国際シンポジウムを企画された後、1990年に奈良県立医大の打田教授の主催で当時の第16回日本血管造影・Interventional Radiology研究会と併催された第3回国際IVRシンポジウムは、その後、本学会の活

動の基本方針として確立され、現在まで定期的に開催されています。

在任中は、1998年に第27回日本血管造影・インターベンショナルラジオロジー学会、1999年には第58回日本医学放射線学会など主要な学会を主宰されていますが、特筆すべきは1995年第2回アジア太平洋心血管IVR学会を主宰されたことです。これは我が国で開催されたIVRの最初の本格的な国際学会であり、欧米の最先端の指導者との交流により、日本はもとより、アジア地域のIVRが向上する大きな機会となりました。

平松先生の笑顔と颯爽とした姿は、国際学会の場で、より華やいでいたように思います。懇親の場で、ドラムを叩き、“My Way”を熱唱される姿を思い浮かべると、今にも音楽が聞こえてくるような気がします。退任後は体調を崩されることがあっても、そのたびに回復された元気な笑顔を拝見してきましたが、残念ながら今回はその願いはかなわなかったようです。先生の長きにわたるご指導に、あらためて感謝申し上げるとともに、追悼の言葉とさせていただきます。



1999年 RSNA



1989年 ECR



1999年 第58回日医放総会